



年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

「仕える者」になるために、「使い物になる者」に

ようやく、皆さんとのミサを再開することができました。修道院のシスターの葬儀を別にすれば、これだけの人の前でミサをするのは一ヶ月ぶりです。えらく緊張します。おそらく小教区に入っている司祭たちも同じ気持ちなのでしょう。

一ヶ月前に、小教区報といっしょに中田神父からの説教案が配られたと思います。おかげで私はこの一ヶ月、説教を準備せずに寝て暮らしておりました。すると反動が来て、ミサ説教を準備するのにずいぶん苦労しました。「こんなに大変だったかな～」と思うくらいでした。公式ミサの中止は、司祭の生活にも悪影響です。

与えられた福音朗読箇所を読み返していて、今まで疑問にすら思わなかったことに疑問を持ちました。9章 33 節から「一行はカファルナウムに來た。家に着いてから・・・」と続いていくのですが、途中でだれがいちばん偉いかを議論していた弟子たちを呼び寄せて言われます。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」(34 節)

ただ、この状況でイエスが「そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた」(36 節)とあるわけですね。ここに登場する一人の子供は、「どこの子」なのか「誰の子」なのか、疑問に思いませんか？音程が外れるので歌いませんが、かつてのアイドル歌手の「赤い風船」という歌を思い出しました。

それはともかく、イエスが示された生き方を私たちはよく理解しなければなりません。「すべての人に仕える者になりなさい。」しかもイエスは、一人の子供を真ん中に立たせて考えさせようとしています。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」(37 節)素直に受け取るなら、目の前にいる「か弱い存在」を受け入れることが、すべての人に仕える者の出発点ということなのです。

誰かに仕える、奉仕するという場合、たいていは納得できる理由があるから相手にお仕えするものです。自分の上司だから、お仕えする。自分を雇ってくれている人だから、お仕えする。これからたくさんのお仕事を学ぶ人だからお仕えする。何か納得できる理由があるからお仕えするものです。

しかし「子供」は、どう考えてもお仕えする相手には見えません。子供はか弱い存在なので、いつ病気するかも分かりません。もう少し我慢できるところを我慢しなかったり、小さなことにも怯えたりします。そんな子供を受け入れ、前に進んでいくのはたやすいことではありません。

それでも、イエスが「すべての人に仕える者になる」その出発点として示したのはどこにでもいる子供の一人だったのです。か弱い存在で

ある子供を受け入れることができるなら、納得できる理由を見いだせない相手にもお仕えすることが可能かも知れません。

上司と認めたくない相手。雇われているわけでもない相手。何も学ぶところがないように見える相手。これらの人にお仕えしなければならなくなった。本心では、「やってられるか」と思うかも知れません。けれども神の前で真に偉大な人は、納得できる理由が見当たらない人にもお仕えし、その中で偉大さを発揮するのです。

福岡の大神学校で長年事務として働いた深堀さんという人がいました。ご健在であることを願いますが、この方は歴代の大神学院院長にお仕えしました。私の在学時代、「この院長は反面教師なのだ」と思った院長がいました。学生はあまり関わらないで過ごすことは可能ですが、事務の深堀さんはそうはいきません。

どんな院長にも忠実にお仕えしたことで、彼はすべての大神学生から尊敬されました。私たちが卒業して教区に戻り、「こんな人と働けない」と少しでも思ったときに思い出したのは深堀さんのことでした。大神学院という限られた空間で、どこにも逃げ場がない中で、深堀さんは忠実な事務方として、私たちにしなければならぬことを思い出させてくれたのでした。

「すべての人に仕える者になりなさい。」イエス様が言う「仕える者」になるために、私は「使い物になる者」にならなければならないと思います。まずは使い物にならなければ、お仕えすることもままなりません。

しかもすべての人に仕える者になるのですから、もっと自分に向き合い、伸ばせる部分を探求し続け、欠けたところを埋め合わせるようにしたいものです。大神学院時代にすばらしいお手本を頂いたことに感謝し、「すべての人に仕える生き方」を探求し続けたいものです。